## Vol.006　オランダ東インド会社（VOC）の足跡を辿る、物語性の高い旅の創造

**ネクストブレイク的に今はあまり知られていない、街や地域をご紹介するコーナーです。観光客があまり訪れることのない魅力的な地を旅することは、旅本来の旅の楽しみ、醍醐味を教えてくれます。**

AUTHENTIC TRAVEL プランナーズ EYE

### 1. 歴史の物語を現代の観光資源へ

現代の観光市場において、旅行者のニーズは単なる名所旧跡の訪問から、より深く知的好奇心を満たす「体験価値」へとシフトしている。この潮流の中で、特定の歴史的テーマに沿って世界各地の拠点を巡る「テーマツーリズム」は、非常に高いポテンシャルを秘めている。本稿では、17 世紀から 18 世紀にかけて世界初の多国籍企業として海洋貿易を支配した「オランダ東インド会社（Vereenigde Oostindische Compagnie、以下 VOC）」の遺産に着目し、その足跡を辿る旅が、いかに付加価値の高い観光コンテンツとなり得るかを考察する。特に、その面影を最も色濃く、かつ「生きた遺産（リビング・ヘリテージ）」として残すスリランカを主軸に、新たな観光の可能性を提示したい。

### 2. VOC の歴史的意義とグローバルな影響力

1602 年に設立された VOC は、単なる貿易会社の枠を遥かに超える存在であった。世界初の株式会社として資本を募り、条約締結権、軍隊保有権、貨幣鋳造権、植民地経営権までをも国家から委譲された、まさに「国家内国家」とも言うべき武装商社であった。彼らの航路はヨーロッパ、アフリカ、アジアを結ぶ壮大なネットワークを形成し、その船団はアムステルダムの港を世界随一の金融・交易の中心地へと押し上げた。彼らがヨーロッパにもたらしたアジアの富は、人々の生活と文化を一変させた。シナモン、クローブ、ナツメグといった香辛料は、かつて金と同等の価値で取引され、食文化に革命を起こした。また、中国の絹織物や景徳鎮、日本の漆器や有田焼などは、王侯貴族の邸宅を飾るステータスシンボルとなり、ヨーロッパにおける東洋趣味（シノワズリ、ジャポニスム）の一大ブームを巻き起こした。この東西の交流は物質的なものに留まらない。日本においては、オランダを通じて伝えられた西洋の学問「蘭学」が、後の近代化の礎を築いたことは周知の事実である。VOC とは、まさに大航海時代が生んだグローバリゼーションの奔流そのものであり、その影響は現代に至るまで世界各地に深く刻まれている。

東イント゛会社紋章

### 3. アジア各地に残る VOC の遺産と、その観光資源としての価値

VOC が拠点を置いたアジアの港市には、今なおオランダ統治時代の建築様式、都市計画、そして文化的な痕跡が点在し、それぞれが独自の魅力を持つ観光資源となっている。

日本（平戸・出島）：徳川幕府の「鎖国」体制下、西欧との唯一の窓口であった出島は、極めて特殊な歴史的文脈を持つ。1609 年に徳川家康の許可を得て平戸に設立された商館、そしてその後の出島への移転。復元された石造りの倉庫やカピタン（商館長）の邸宅は、当時の国際交流の緊張と興奮を現代に伝え、歴史の舞台に没入する体験を提供する。

インドネシア（ジャカルタ）：かつて「バタビア」と呼ばれ、VOC の東インド総督府が置かれたアジア経営の中心地。旧市街のファタヒラ広場には、旧バタビア

© The Tourism Research Institute, Ltd. All rights reserved.

市庁舎（現・ジャカルタ歴史博物館）や VOC 時代の倉庫群が残り、往時の「東洋の女王」と称された栄華を偲ばせる。ただし、その遺産は大都市ジャカルタの中に点在しており、テーマ性を持った周遊には工夫が求められるという課題も浮き彫りになる。

マレーシア（マラッカ）・台湾（台南）：これらの都市では、ポルトガルやイギリスなど他の列強との支配の歴史が重層的に残る。マラッカのスタダイス（旧市庁舎）を中心とする鮮やかな赤色のオランダ建築群は、街の象徴として名高い。一方、台南には VOC が築いた要塞「ゼーランディア城（現・安平古堡）」や「プロヴィンティア城（現・赤崁楼）」の遺構が残り、台湾におけるオランダ統治時代の息吹を力強く伝えている。

世界遺産コ゛ールの町並み

**4. 至高の歴史体験：世界遺産ゴールを擁するスリランカの優位性**

数ある VOC の拠点の中でも、スリランカ（旧セイロン）は、その歴史遺産の保存状態と活用において群を抜いている。特に南岸の港湾都市ゴールは、VOC が築いた要塞と旧市街がほぼ完全な形で保存され、ユネスコの世界遺産に登録されている。

「生きた博物館」としてのゴール旧市街：ゴールの要塞都市を歩くことは、単なる遺跡観光ではない。堅牢な城壁の内側には、石畳の道、切妻屋根のコロニアル建築、オランダ改革派教会が広がり、人々が今も生活を営んでいる。それはまさに「生きた博物館」であり、旅行者は 18 世紀にタイムスリップしたかのような錯覚に陥る。城門や建物の壁には、今なお VOC のモノグラムがはっきりと残り、歴史の証人として静かに佇んでいる。

**歴史と融合する上質な観光体験**

ゴール旧市街の魅力は、歴史的建造物の多くがその趣を最大限に活かしたブティックホテルやカフェ、アンティークショップとして再生されている点にある。旅行者は、VOC 時代の館に宿泊し、当時のものと思われる VOC の刻印が入ったグラスや古銭をアンティークショップで探すことができる。VOC 時代に設置された通貨造幣所（ミント）の逸話も興味深い。ゴール鋳造のコインには「G」、コロンボ鋳造のコインには「C」が刻印されており、小さな古銭一つにも壮大な交易の物語が秘められているのだ。

C が刻印された古銭

**歴史遺産と現代ラグジュアリーの融合**

ゴール要塞内には、世界的な高級ホテル「アマンガラ」が、かつての総督邸を改装して運営されている。また、要塞の外には、スリランカが誇る天才建築家ジェフリー・バワの傑作ホテルが点在する。このように、歴史的遺産の重厚さと、現代における最高峰のホスピタリティが見事に融合している点は、富裕層や知的好奇心の旺盛な旅行者にとって、他に代えがたい魅力となる。

**VOC 遺産の広がり**

スリランカの魅力はゴールに留まらない。最大都市コロンボ近郊には、VOC が物資輸送のために築いた運河網（ネゴンボ運河など）が残り、ゴールの東 40km

© The Tourisum Research Institute, Ltd. All rights reserved.

に位置するマータラは、最高級シナモンの集積地であり、星形の「スター・フォート要塞」が佇む。これらの拠点を結ぶことで、スリランカ国内だけでも VOC をテーマとした周遊ルートを構築することが可能である。

ゴール旧市街に残る数々の紋章

スリランカの観光といえば、従来キャンディ、シギリヤ、ポロンナルワといった内陸の仏教遺跡（文化三角地帯）を巡るツアーが主流であった。しかし、本稿で論じたように、VOC の遺産を辿る旅は、これまでのイメージを覆し、アジアとヨーロッパの交流史という壮大な物語を体感できる、極めて知的で魅力的なコンテンツである。

旅行業界は、この「VOC」という歴史的キーワードを軸に、日本、台湾、マレーシア、インドネシア、そしてスリランカといった国々を繋ぐ、広域周遊型の教育的旅行（エデュツーリズム）商品を開発すべきではないだろうか。特に、歴史遺産の保存状態と観光インフラが両立するスリランカは、このテーマの集大成として位置づけることができる。

歴史の深淵に触れ、上質な滞在を愉しむ。この新しい旅の形は、今後の観光産業が目指すべき、質の高い価値創造の一つの答えとなるに違いない。

© The Tourisum Research Institute, Ltd. All rights reserved.